

第3部 2つの声からみえてきたもの～アンケートのまとめ～

(1) 加入しない理由と加入者の推測の照合

第2部の調査によれば、未加入者が加入しない理由として最も多く挙げたのは「必要性を感じない」で全体の約半数を占め、次いで「時間的な負担が気になる」「人間関係が煩わしい」「活動内容に魅力を感じない」と続き、傾向として「町会活動が生活に結びつきにくい」とことと「負担感・心理的抵抗」の2点から、加入に至らないとみられました。

また第1部の調査で、町会側に対し「未加入者が加入しない理由」として考えられる要因を尋ねたところ「町会の必要性を感じない」が最多であり「人間関係が希薄になっている」「活動内容に魅力を感じない」といった推測が続き、未加入者の認識と一致する部分があります。

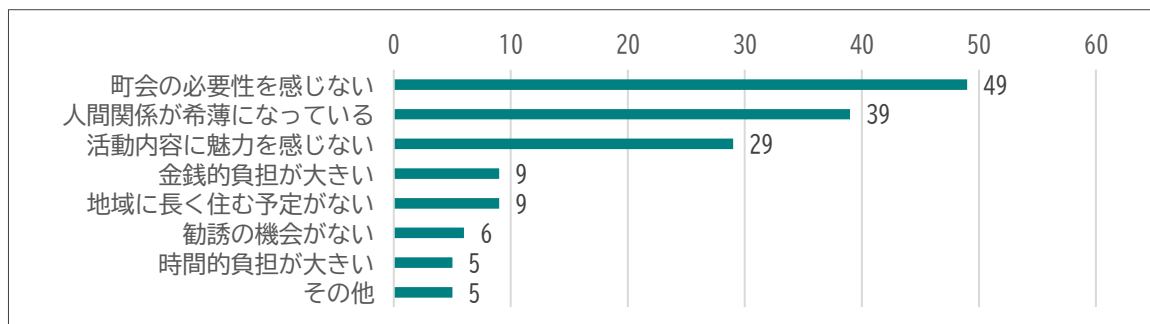
しかしながら「時間的負担」については、未加入者アンケートでは約半数の回答者が挙げているのに対し、町会側の推測ではそれほど多く挙げられていません。

総じて「必要性」「人間関係」「活動の魅力」が共通して挙げられており、これらは双方が同じく認識している課題であり、町会加入の最大の障壁となっているといえます。

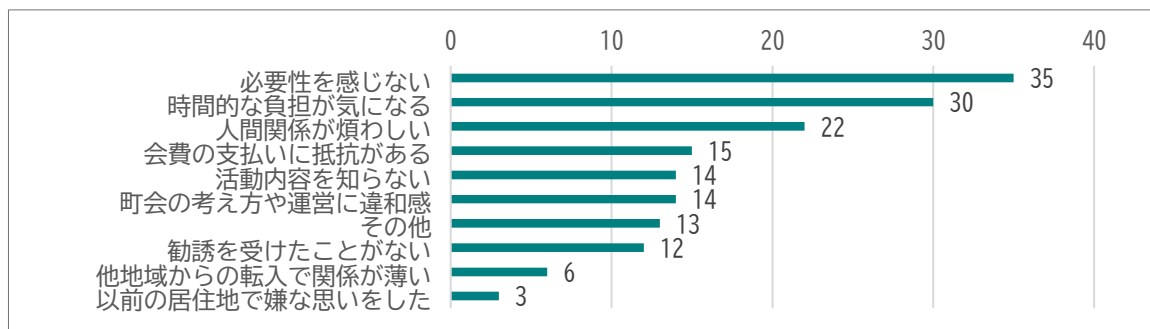
一方で、相違点として浮かび上がったのが「時間的負担」の捉え方であり、未加入者は「仕事や家庭の事情で時間が取れない」ことを現実的な理由として挙げていますが、加入者はあまりその点を重視していないようにみえます。

このギャップは、町会活動にかかる実際の時間的負担を加入者が軽く見積もっている、あるいは負担を「当然のもの」と受け止めていることに起因すると考えられます。

〔第1部 図3：再掲〕未加入理由の推測（n=66）



〔第2部 図9：再掲〕未加入理由（n=65）



(2) 町会の必要性に対する認識の差

第1部の調査結果によれば、町会加入者の多くは「見守りなどの福祉活動」「避難訓練などの防災活動」「親睦会などの交流活動」といった、地域の安全やつながりを守るうえで必要な活動を重要視しており、加入者にとって町会の存在は日常生活の安心感と結びつく地域インフラの一部として位置づけられていると考えられます。

一方、第2部で示された未加入者の意識では「町会の必要性を感じない」とする回答が最も多く、自分の生活に特段の支障がない、未加入でも地域とのつながりを保てるとの声も見られ、町会を通じたコミュニティ形成に対する必然性は薄く、未加入者にとって町会は「なくても困らない存在」と認識されており、日常生活での利便性や実利性が実感されていないことが明らかです。

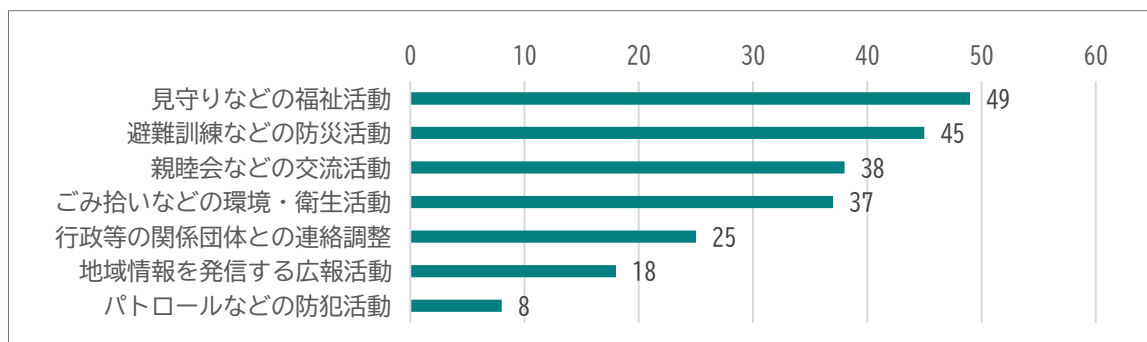
両者を照合すると、町会加入者は「町会が果たす役割」を当然視しているのに対し、未加入者は「役割の見えにくさ」を理由に必要性を感じていないことが分かります。

総じて、加入者にとって町会は「あるのが当たり前」であり、未加入者にとっては「存在意義が不明確」という構図といえます。

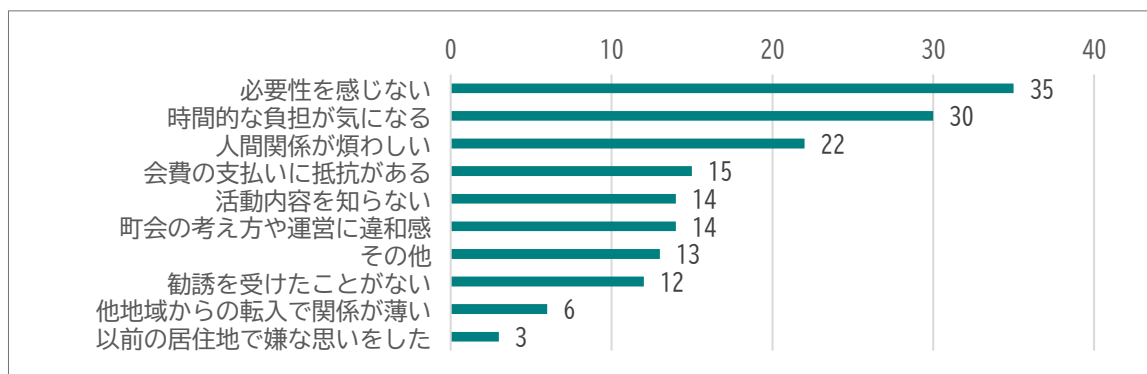
このギャップを埋めるには、町会の活動や役割を「見える化」し、未加入者にとって実感できる形で情報を発信する必要があると考えられます。

防災訓練や見守り活動の具体的な効果、会費の使途や成果を明示することは、町会の必要性を理解してもらう一助となるほか、未加入者が町会活動の恩恵を実感する機会を得ることで、町会を地域の基盤として再評価する契機となることが期待されます。

〔第1部 図31：再掲〕 町会に期待される役割（n=73）



〔第2部 図9：再掲〕 未加入理由（n=65）



(3) 人間関係や煩わしさの捉え方

第1部の調査では、町会が顔の見える関係を大切にしていることがわかりました。

交流・親睦を目的とした活動、健康増進を目的とした活動を通じて隣人と交流することは「困ったときに助け合える」「日常的に声を掛け合える」関係性をつくる基盤として機能していると考えられます。

また、防犯・防災の観点からも「互いに知り合いであること」が地域の安全性を高める要素として機能しており、町会加入者にとって人間関係は「支え合い」の基盤と位置づけられているといえます。

一方、第2部で明らかになった未加入者の声には「人間関係が煩わしい」との回答が目立ち、付き合いを強制される、役や行事が割り当てられる、人間関係のトラブルに巻き込まれたくないといった懸念が表れています。

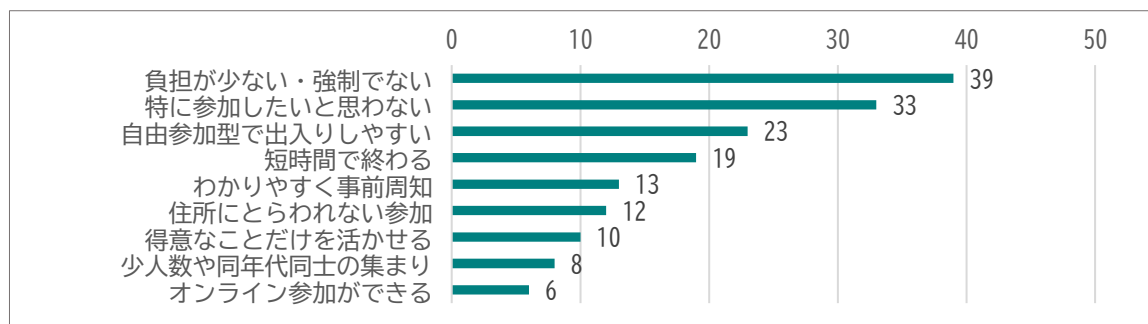
自由記述では「閉鎖的」「仲間意識が強すぎて入りづらい雰囲気がある」といった意見もあり、人間関係を負担と捉える意識が根強いことが分かります。

特に現役世代にとっては、町会に伴う人間関係は、時間的・精神的なコストを増やすものと認識されているといえます。

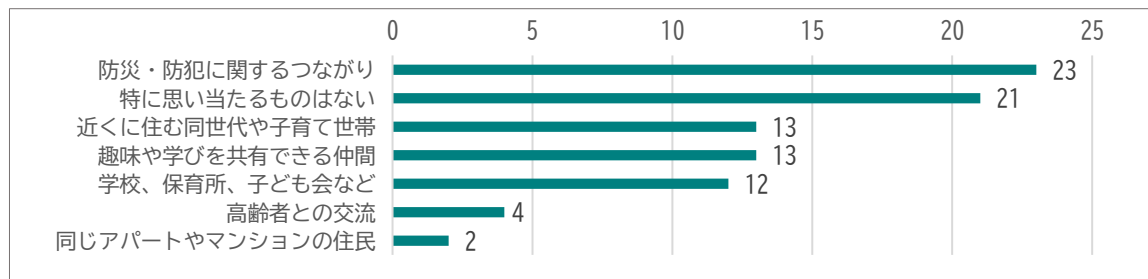
総じて、人間関係に対する認識は「人間関係があるからこそ安心できる」のに対し、未加入者にとっては「人間関係があるからこそ煩わしい」という逆の評価が下されていることがわかります。

第2部の調査でわかったように、未加入者にとって町会は「必要な時だけ関わりたい」存在であり、その活動にも「負担が少ない・強制でない」「自由参加型で出入りしやすい」ことを前提としていることから、強制的・固定的な人間関係への抵抗が煩わしさにつながっていると考えられます。

〔第2部 図15：再掲〕 参加しやすい関わり方（n=65）



〔第2部 図18：再掲〕 つながりたい相手（n=65）



(4) 金銭的負担・時間的負担に対する意識

第1部の調査結果によれば、会費は町会の運営、会館管理、親睦会、福祉活動などに幅広く使われています。

未加入者が加入しない理由として「金銭的負担」を挙げた町会は全体の1割ほどに留まっており、町会加入者にとって会費は地域を維持するための当然の出費として受け入れられているといえます。

また、役員や班長といった役割についても「なり手不足」を課題に挙げつつも、その要因としては「時間的余裕がない」「仕事や家庭との両立が難しい」といった負担感よりもむしろ「辞めづらい雰囲気」「意識が低い」といった心理的な要素を重視しているといえ、未加入理由に「時間的負担」を挙げた町会も全体の1割ほどに留まりました。

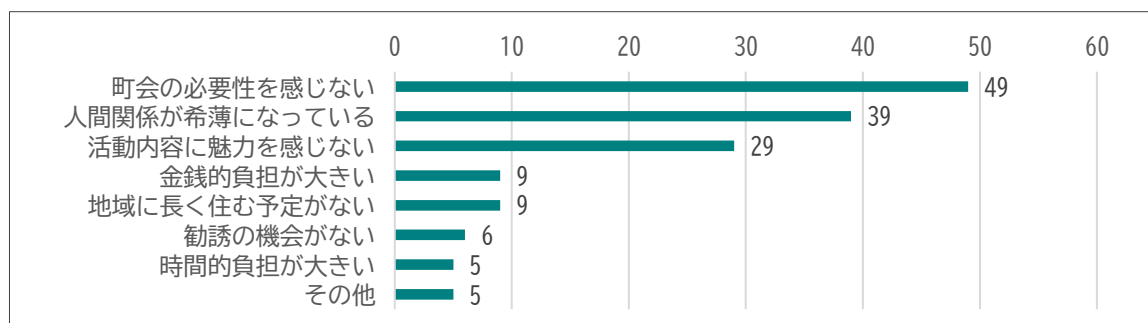
一方、第2部の調査からは、時間的負担や会費負担を「加入しない理由」として挙げている未加入者が一定数いることが明らかとなりました。

一定数「会費の使途に対する不信感」も見られたほか「時間的負担」に関しては未加入者の意識が顕著であり、仕事や子育てなどで忙しい世代からは「時間が合わない」「班長の負担が大きい」「現役世代に負担させる風潮がある」といった声が寄せられました。

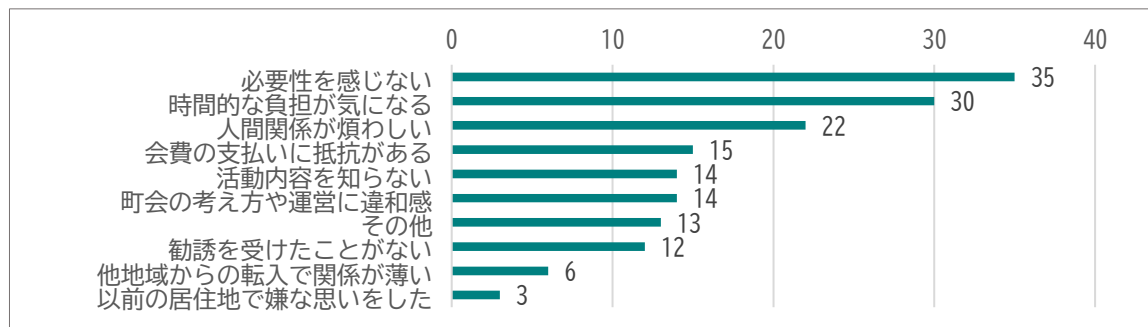
総じて、町会活動には一定の経費と労力が必要であるという認識は共通であるものの、受け止め方には大きな違いがあるといえます

特に、時間的負担についての認識の隔たりが大きく、加入者は「町会にいる人のなかで役割分担」する構図であるのに対し、未加入者は「そもそも担えないから加入しない」と感じているといえ、この差が町会加入の意思決定に直結していると考えられます。

〔第1部 図3：再掲〕 未加入理由の推測（n=66）



〔第2部 図9：再掲〕 未加入理由（n=65）



(5) 情報伝達・周知の在り方

第1部の調査結果では、町会加入者の多くが「回覧板」「口頭による伝達」といった、従来型の方法に慣れ親しんでおり、情報が十分に行き渡っていると感じています。

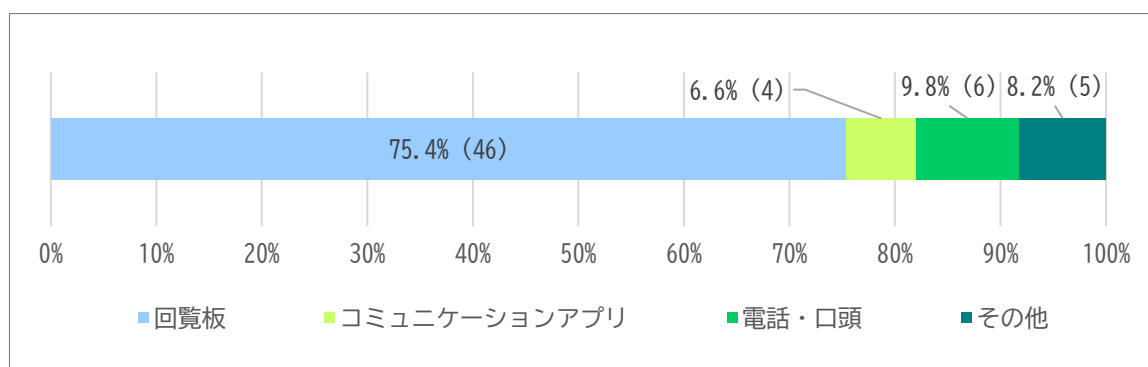
特に高齢世帯にとっては、紙媒体や対面での周知が馴染んでおり、加入者にとっては大きな不便を感じていないのが実情であるといえます。

一方、第2部の調査からは、未加入者から「活動内容を知らない」「活動・行事の情報が届かない」との声が寄せられ、内容が分からないから入る意味も分からない、加入を検討するきっかけがないという情報不足が大きな要因となっていることを示しています。

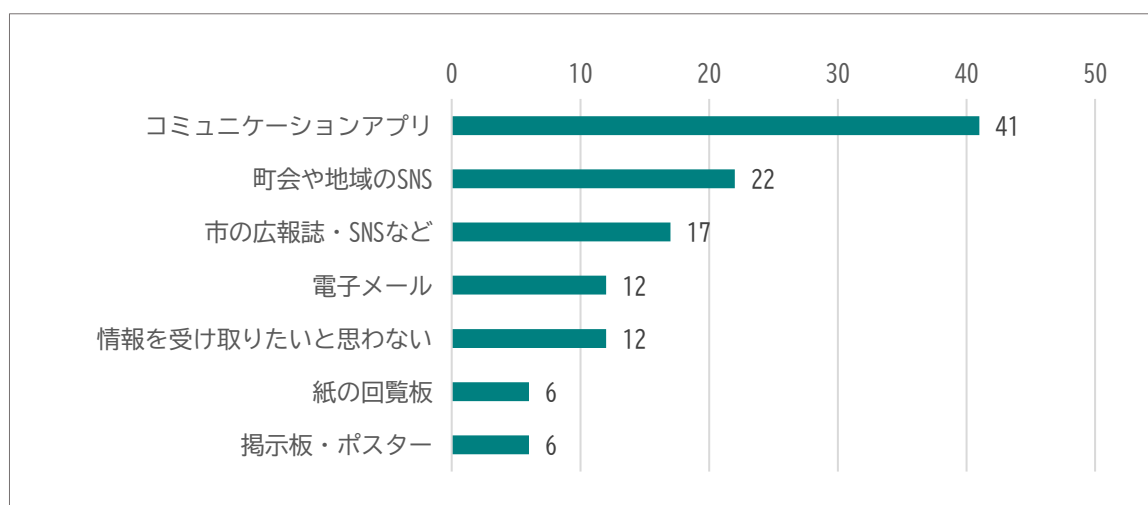
また、情報の受け取り手段についても、町会側は回覧板などのアナログな方式が中心であるのに対し、未加入者からは「コミュニケーションアプリ」での情報伝達が最も求められているという違いがあります。

総じて、加入者にとっては情報を伝えるネットワークが構築されているのに対し、未加入者は「情報がなければ町会を理解できない」と感じているほか、加入者が慣れ親しんでいる情報伝達方法では、未加入者には情報が届かない仕組みであるため、この差異が、町会に対する理解や参加意欲に直結しているといえます。

〔第1部 図5：再掲〕 町会の連絡手段（n=61）



〔第2部 図16：再掲〕 情報の受取手段（n=65）



(6) 町会運営のあり方

第1部の調査結果によれば、(2)でも論じたとおり、町会に期待される役割として「防災・防犯」「高齢者の見守り」「地域美化」など、生活の基盤を維持するうえで不可欠な活動を挙げており、町会を「地域社会のインフラ」として位置づけています。

また、今後の運営のあり方については「未加入者など新しい参加層を増やす」「近隣町会と統合・連携する」「役員や仕事を減らして組織を小さくする」といった意見が示されており、従来の体制では限界があることを認識しつつも、町会そのものを維持すべきだという意識が強いことが明らかになりました。

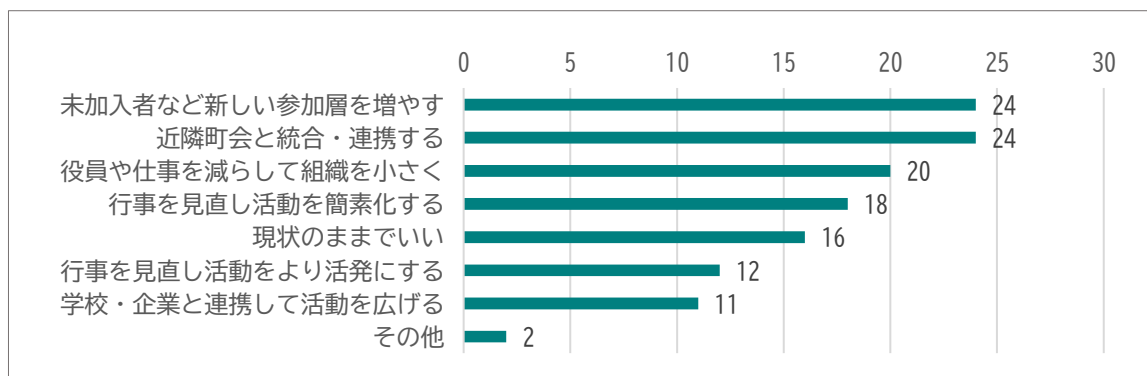
一方、第2部において未加入者の意識をみると、日常的に町会と深く関わる必要はないとする声が多く、町会を「必ずしもなくても困らない存在」と捉えている傾向がうかがえます。

ただし、未加入者の多くが地域との関わりを全く拒否しているわけではなく「助け合い・見守り」や「災害に備えた活動」であれば参加してもよいとする声も一定数確認されました。

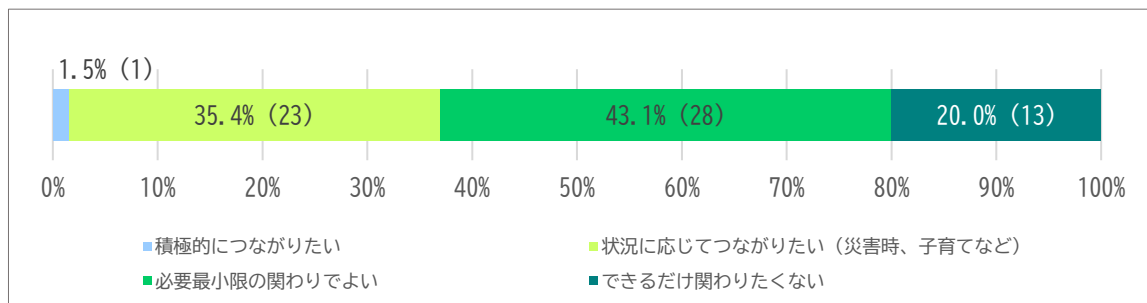
特に「強制されないこと」「時間的負担が少ないこと」「目的が明確であること」が整えば参加の余地があるとする意識が見られ、町会活動そのものへの拒否感というよりも、従来の形式的・固定的な関わり方や煩わしさに抵抗を持っていることがわかります。

総じて、加入者は町会を「地域の維持に必要なもの」とみなし、未加入者は「役割が見えにくく負担に見合う利点を感じにくい」として距離を置くという対照的な構図が浮かび上がっており、今後の町会には「その必要性をどのように共有するか」と「多様な生活に即した柔軟な関わり方をどう設計するか」という二つの課題があるといえます。

〔第1部 図31：再掲〕 今後の町会運営の在り方（n=71）



〔第2部 図18：再掲〕 近所づきあいに対する気持ちと年代との関係（n=65）



(7) 2つの声からみえてきた「コミュニティに求められるもの」

本調査を通じて明らかになったのは、町会加入者と未加入者の間に存在する「町会への期待や距離感の違い」であり、双方が同じ地域に暮らしながらも、町会に対する認識や関わり方に大きな隔たりがあるという点です。

加入者は町会を「地域の安全・安心や福祉を支える基盤」として肯定的に捉えており、地域でのつながりや助け合いの場を確保する仕組みとして認識している一方で、未加入者の多くは「必要性を感じにくい」「負担に見合う利点が不明瞭」といった理由から町会と一定の距離を保つ姿勢を示しています。

ただし、そうした意識は一概に否定的なものではなく、関わり方に条件を付けているような側面も見受けられました。

具体的には、災害時の協力や子育て・高齢者支援といった助け合いの場面では、一定の参加意欲が示されており、町会活動のすべてに関わることは「時間的制約」「人間関係」から難しいとしながらも、状況やテーマによっては町会活動に関わってもよいと考える人は少なくありません。

言い換えれば、町会という仕組みそのものを否定しているというより、従来の「全面的に関わることを前提とする運営形態には馴染みにくい」という意識が広がっているといえます。

また「役割が一部の人に偏っている」「担い手不足による負担が大きい」「活動が特定の人向けに感じる」といった会員間での不公平感や「地域情報が町会に加入していないと届かない」といった情報アクセス上の格差も指摘されました。

総じて、本調査に寄せられた様々な意見は「町会の存在意義そのもの」を肯定するか否定するかという単純な二者択一に収まるものではなく、むしろ「従来の運営形態や仕組みが現代の生活様式に必ずしも適合していない」という課題意識だといえます。

役割の固定化や過重な負担を解消し、ライフスタイルや価値観に即した「納得し無理なく関われるコミュニティ」が、双方の視点から導かれたキーワードであるといえます。

今回の調査は、町会の内側と外側、両方の立場から率直な意見を収集した、本市として初めての試みとなりましたが、その結果、町会を支える住民の期待や負担感、町会から距離を置く住民の実感や関わり方のスタンスなど、これまで断片的にしか把握できなかった要素を多角的に捉えることができました。

ここに示された率直な声は、町会という仕組みの今後の在り方を考えるうえで不可欠な視点であり、地域社会が抱える普遍的な課題を映し出すものでもあります。

今後、町会と地域住民とが互いに理解を深め合い、ともに地域コミュニティの在り方を描きだしていくための一助となることを願って、報告書のまとめとします。